

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成 23 年度派遣報告書

—インドネシア共和国・ハサヌディン大学・インドネシア語・H23. 11. 26 -H24. 3. 15—

平成 23 年度入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

大出亜矢子

#### 自身の研究テーマについて

「生態系サービス」とはミレニアム生態系評価（2001～2005）により定義された、人間社会に恩恵をもたらす生態系機能のことである。流域における森林生態系サービスは、水の安定的供給や土砂流出、土砂災害の防止の機能により、地域の持続的な生存基盤の維持や危機管理に貢献している。これを維持するためには、サービスの供給減である上流域に暮らす住民の、土地利用に関する意思決定が重要であり、この土地利用状況は地域の生計環境を反映したものである。

標高800m~3000mに位置する北トラジャ県のような急峻な土地における土地利用状況は周辺の地理空間条件に大きく制限を受けるため、小地域別に多様な生計環境が存在している。またこの地域はその地形と人為的な土地利用の影響から、土砂災害と土壌流出の頻発する場所である。上流域住民の生存基盤の維持と、広域な下流域への安定した生態系サービスの供給維持を両立するためには、上流域住民の多様な生計環境と各種生態系サービスの供給の間の関連性を見出し、土地利用管理における効果的な地域戦略を策定することが重要である。

本研究は、土壌流出や土砂災害の頻発するインドネシア共和国南スラウェシ州のサダン川上流域において、多様な土地利用に対応した上流域住民の生計環境と生態系サービスの定量評価の関係性を明らかにすることを通して、その両面からの効率的で公益的な上流域の土地利用の管理を目指すものである。

#### 研修語学の概要

多民族国家インドネシア共和国は、赤道をまたがる 1 万 8000 以上の島によって構成され、またそこでは 500 以上の言語が話される。「インドネシア語」は、1945 年に発布されたインドネシア共和国憲法にて国語として規定された。("Bahasa Negara ialah Bahasa Indonesia " , No.36 Undang-undang Dasar Republik Indonesia Tahun 1945)

その後も民族の伝統文化を引き継ぐ地方言語は、それぞれの地域で日常的に使用されている。

#### 語学研修の内容について

派遣先であるハサヌディン大学では、東南アジア研究所によって設置されていた現地のフィールドステーションにて、語学の勉強を行った。常駐するフィールドステーションのスタッフに質問することで、丁寧な解説をいただくことができ、インドネシア語の理解を深めることができた。午前は、日本から持

参した教材を基に、単語の勉強やリスニングに力を入れ、午後はインドネシア語の研究関連文献を読み進めたり、ハサヌディン大学の構内にある樹木名のファイリング作業などを行った。その際もフィールドステーションのスタッフには大変お世話になった。また滞在中は、友人や先生方とのコミュニケーションやディスカッションは基本的にインドネシア語で行い、皆から発音を指摘されたり、語彙の使用を訂正されたりすることの一つ一つの経験によって、インドネシア語の運用能力向上に成果を上げることができた。

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

研究対象地域である北トラジャ県は景観や伝統葬式文化を売りにした観光産業で栄える場所である。現地では地方言語であるトラジャ語が山岳地の村落では使われるが、国内外からの観光客の多い都市部ではインドネシア語が日常的に使用される。今回の研修によりインドネシア語の運用能力の向上に成果を出し、派遣期間中に対象地域でインタビュー調査やアンケート調査を行うことができた。こうした調査は、研修言語であるインドネシア語を通して行ったが、山岳地域の調査村で都市部へのアクセスが悪くなるほど、インドネシア語での情報の収集が難しくなるということを実感した。このように、国中でインドネシア語が公用語として普及する一方で、中央都市から離れた地方における文化や生活に根差した日常的側面においては、地方言語が使用されている。今回の研修により、研究を進める上で更なるインドネシア語運用能力の向上に、加えて地方言語習得の必要性を感じた。

### 目標の達成度や反省点について

今回の研修によって、研究資料の収集や、インタビュー調査、アンケート調査などをインドネシア語を通じて行うことができ、今後の研究に必要なデータを入手することができた。しかし、こうした現地で得た情報に基づく研究成果を流暢なインドネシア語アウトプットするレベルには至っていない。今回帰国直前にハサヌディン大学にて、研究成果を発表する機会を得たが、準備期間不足と自分のインドネシア語能力に対する不安もあり、英語にて、行ってしまった。今後、論文や報告書といった研究成果を地域に還元するためには、現地言語によってアウトプットする意義は大きいだろう。今後もインドネシア語能力の更なる向上に努めていく。



写真：インドネシア語学習光景(左)、  
教えてくださったフィールドステーションスタッフ Nur さん(中)、  
樹種の特定 (右)